

白河学フィールドワーク 1 1

平成 2 2 年 4 月 2 5 日

修学遠足第 1 1 回

テーマ・・・白河－会津街道 長沼地区から勢至堂峠、太閤道を歩く

目的地・・・榊衝神社 長沼城址 石背国造神社 早坂の一里塚 藤沼神社
勢至堂一里段 太閤道

桜が満開に咲き、朝から好天が予想される陽射しだが、やはり今年の春の朝は薄ら寒い。先日の講義の折、金子誠三翁は白河の北方部も訪れたいですね、とおっしゃっていた。今月は長沼から勢至堂峠に行く予定だと告げると、太閤道は私の足では・・・と残念がっておられた。

集合時間には 5 名が参加、車 1 台に全員が乗り、国道 2 9 4 号線を北上、本来白河－飯土用－安養寺－牧ノ内－早坂－長沼－勢至堂のルートで行きたいのだが、本日は榊衝を目指して天栄役場を抜け、旧長沼町に入る。今日は江花川を溯上するルートなのである。先夜、翁は面白い事を言った。須賀川に須賀川と言う川はなく、白河、浅川、石川もしかり、と。その須賀川を代表する江花川、釈迦堂川は勢至堂峠、馬入峠の分水嶺から東へ流れ、太平洋へと至るが、分水嶺の向こうの流れは猪苗代湖を経て日本海へと行く。

榊衝神社

5 年ぶりに榊衝社を訪れる。石段を登ると直ぐに、遠くから見た景色とは違った厳かな森の空気変わった。中段にある立派な山門の扁額には「鹿島太神宮」とある。なぜ、榊衝社なのに？と皆で首を傾げる。



榊衝神社 大鳥居にて



鹿島太神宮とある

拝殿のある最上段まで登ると、皆で流石の凄い建築物に眼を見張る。奥宮の横へ巡って屋根を仰ぐと巨大な鬼の面が左右1対別の表情で虚空を睨んでいる。境内には人気はなく、凜とした杜の空気に包まれている。この社の由緒書か長沼町の町史を覗いてみたくなった。

以前から表郷の武鉾と長沼の榊衝には、何か通低するものがあるかと、考えていたが、歴史家の高橋富雄は「古代語の東北学」の中で次のように記している。

「建鉾ないし鉾建の状況がホコをたてたというよりもホコをつきさしたという状況だったろうことは磐境の景観から想像できるのですが事実それを傍証する突き鉾の具体例があるのです。・・・その地の城輪神としての国内一ノ宮の勧請神として、都々古別神の分神をまつたのが榊衝神社だったと考えられます。」と述べている。

鬱蒼とした社叢の山肌はまだ蕾も持たぬヒメジャガが小さく群れていた。

長沼城址

桜に埋もれて見える山城の岩壁に文学碑のレリーフがはめ込まれている。郷土の作家、中山義秀の一文である。今日が桜花のピークと人で溢れている。この山城に桜がこんなに多いと分った。山城には石段や登城の通路などない。岩に刻んだステップか細い仙道で観光客の列に続いて登るしかない。途中には山城らしい曲輪や侍の従事する所か平坦地がある。頂上の平坦地には城郭があったのであろうが、今は「日高見神社」があった。古代この列島には東部に日高見の国があったそう。その比定地は常陸地方か？徐々に北に追いやられ、岩手北上地方に名を残す。(会津地方喜多方は?) どのような経緯でこの小山の上に古い古い神が残ったのであろうか。



中山義秀の「碑」より



日高見に稲荷神が合体している

石背国造神社

長沼の町外れに「石背国造神社」がある。平坦地で境内は狭い。拝殿も真新しく、社務所と神職の住居敷地が連なっている。しかし歴史は古いのであろう、社、境内地も古代はずっと広がったに違いない。建彌依米命と建美名方命を祭神に祀っている。なぜ諏訪神の建美名方を並列してあるのだろうか。建美名方（大国主命の子）と建彌依米（石背国造）は関係あるのだろうか。

境内に「花本祖神」と書かれた自然石の碑があつてとても気になっていた。花や木にも命や祖先があると思ひ、飯豊山麓の草木塔信仰と同じかな？と思っていたが木ではなく本であった。



石背国造神社

さて、「石背」とは何なのだろう。(イワシロ)と読むか「石城」は(イワキ)である。岩瀬郡があり、イワシロからイワセへ移っていったのだろうか。畿内山背はヤマシロである。ここでまた高橋富雄の東北学が手引きとなる。

「私くしは、石背郡も石背国も、イワシロ郡であり、イワシロ国であって、字も背は宛字であって、石城郡・石城国同様、城だったとおもいます。ただ、海道石城国との混同をさけて石背国とし、よみも海道はキ、山道はシロと区別したと考えます。これは山城国がはじめ山背国、のち山城国になるのと逆の関係です。白河郡の八槻郷風土記逸文にもこのエゾたちが「石城」に拠って抗戦したとあり、石背国でも石城の字は生きた用法になっているのです。ただし、石背郡を磐瀬郡と表記替えるのは、背をセともよんだ上での瀬字への転化だったのですが、それもそのセを関や塞のセキ、セク、のセとみなしての背＝瀬だったと考えられますから、背＝城の基本の性格は維持されていたと考えるのです。背訓・瀬字ともに転音・宛字です。」

とあって参考になる。

太閤道

桜花咲き誇る長沼城址の上り口に案内板と共に「勢至堂峠古道」というパンフレットが置いてあって自由に取り求めた。長沼の歴史民俗資料館によるもので、私達はまさにこれから向う道先案内となる。藤沼公園の芝生にゴザを広げ、遠足らしいおにぎり昼食。ガスで湯を沸かし、汁物付き食後のコーヒー付きに皆、おいしいを連発。早坂の一里塚、藤沼神社、道谷坂陣跡、勢至堂一里壇を巡って勢至堂集落から国道へ上がると現在の峠はトンネルとなり、手前に駐車する。一行の中には旧道の記憶がある世代と全く知らない世代に分れたが、足元を整え通行止めになっている旧峠道の舗装路を歩く。左に溪音を聞きながらキブシの花が道へ垂れ被り、長閑な空間に雑多な春の小鳥たちが囀りまわる。「太閤道」の板看板のところで二手に分かれ、一班はそのまま舗装路を峠まで行ってもらおう。(誰もど

こが「太閤道」なのか分らないのだ。Y氏は先週も来て見つけられなかったのだ。)



太閤道入り口

もう一班は沢の対岸の崖下を道らしき踏み跡をたどる。岩が何度も崩れ落ちた地形を行くと、急に岩間を右折する。完全に「太閤道」らしい一定の幅員に造られた古い道形となって、真っ直ぐ上へ続いている。頂いた資料によると関東小田原城を攻め、奥羽平定のため江戸ー白河間を佐竹義宣に、白河ー会津間を伊達政宗に命じた豊臣秀吉は、この区間幅三間の街道に整備した。太閤の奥羽仕置は1590年8月6日白河に着き7日長沼に宿泊、8日この峠を越え、当時の黒川へと向かい各地で仕置発令、刀狩や検地を行った。



太閤道分岐点 左に行く

しばらく行くと平坦な峠に辿り着く。

16世紀の古い街道がそのままの姿で残っている。不思議な古道は古い石柱のある広場のような峠へ辿り着く。



郡境標識

ここで私は峠へ向った班を迎えに山越えで迷いながら大量の汗を流す事となる。その太閤道の頂上平坦地に湿った所があって、白いペンキの残る文字標識が地面に朽ちている。此処が茶屋跡に違いない、と皆で結論とした。峠ではあるが井戸が作れそうである。

郡境標識は平成 7 年執念で土中に眠っていた石碑を探し当て、再建した記録が記してある木柱も立っていた。



郡標石